

定年留学してみませんか？

シニアも留学の夢を！



スペイン文化の一端紹介

コスタ・デル・ソルの生活

物価は日本よりも安い



人間と時間とどちらが主？

本の出版「定年留学してみませんか？」



最高齢？まだ上手がいた！

「タケシ」と呼ばれて・・・



クラス仲間を我が家に招待

金髪の美人女子大生とのキス

ギターの練習ぶりも披露



<パワーポイントで70枚ほどの写真をご紹介します>

はげあたま

皆さまこんにちは。ただいまご紹介いただきました清水武でございます。

こちらにお邪魔して、会場に私と同じような仲間がいることを拝見して親しみを感じております。この頭です。先日、こんなことがありました。

私は年金生活に入ってからできるだけ節約生活を心がけるようにしています。散髪代もその一つ。床屋さんに行くのをやめ、けっこう手先の器用な家内がハサミを操り、私の頭を刈っています。

とはいっても、大事な行事に参加するときや、大切な人と会わなければならないようなときには、やっぱり床屋さんに行くんですね。

でも、この頭です。<頭を下げて指でさす> 他のお客さんよりも髪の毛のある部分がぐっと少ない。そこで散髪が終わり料金を払う段になって、店主に言ってみたんですね。

<落語の話し方で>

「マスター、ほらご覧のように、私の頭はほかの人の髪の毛の量の半分以下ですよ。禿げている部分はまったく手をかけなくてもよいし……。だから料金も少しは割り引いてくれませんかねえ」。

と、そこの主人、なんて言ったと思いますか？

「旦那さん、そんな無理をおっしゃらないでくださいよ。確かに旦那さんの髪の毛は少ない。ですから、私としては一本たりとも抜いたり傷めたりしてはいけないと思って、大変な気を遣ってハサミを動かしているわけですよ。逆にこちらが割増料金をいただきたいくらいですよ」

敵もさるもの、上手をいくもんですねえ。あの中高年のアイドル、綾小路きみまろさんだったらこう言うでしょう。

「中学時代はイガクリ頭。高校時代は髪もふさふさの美少年でした。あれから60年——。昔は目の前が明るかった。今、明るいのはこの頭だけ……」

ともあれ、頭が輝いていること即、人生が輝いていることには通じませんが、でも頭の輝きのように第二の人生も輝かせていきたい、というのが今日の私の話しの総合テーマであります。

シニアも留学の夢を！

60歳で定年を迎えるに当って、私はこれまでの体験、積み重ねを最も効果的に生かしながら、所期の人生目的を達し、社会にも貢献できる道について考えました。現役時代には国立にあるNHK学園高校の教師を務め、その後、聖教新聞のパナマ特派員として北南米大陸とヨーロッパを回っておりました。

そのとき約10年間にわたって中南米の各国を回って感じたこと——それはラテンアメリカ、つまり中南米の文化の原点はすべてスペインであるということでした。コロンブスの新大陸発見以来、ヨーロッパの人と文化が中南米に流れ込んでいたからです。

以来、いつかはスペインに行き、その原点を探りたい、特にその文学の原点ともいべき、

『ドン・キホーテ』を究めてみたい、との夢を抱いておりました。そこで、定年を迎えると、今度は「社命」ではなく、「自らの意思」で スペイン行きを決めたのです。

私の高校時代、今から 60 年前は、海外留学なんて夢のまた夢、でした。1 ドル 360 円。それも自由に外貨が手に入らない時代でした。あれから半世紀。日本と世界の環境は変わり、日本の経済力が強くなったお陰で、今は 1 ドル 110 円前後。「国際化」の波に乗ってだれでも海外に行かれる時代です。そして少し無理をしてでも、子供を海外留学に送り出す親も少なくありません。

そこで私は思うのですが――。

日本経済の高度成長のために、モーレツに働いてきた親たち、つまり、今の私どもも、少し人生を振り返る余裕のできた定年後には、子供たちと同じように「留学」といった夢を持って、許されるんじゃないかなあ、なんて……。

今、将来の年金制度について盛んに論議されていますが、幸いなことに、真面目に定年まで働いた日本人であれば、現時点での平均の年金は、ほぼ誰でもが海外で生活することができるくらいの額だと思います。もちろん、ニューヨークやロンドンなど、先進国の大都市は生活費も高く大変ですが、それ以外でしたらほとんどの場合、日本よりはるかに安い額で生活することができるからです。

今、海外に長期間滞在し生活するというロングステイが静かなブームとなっています。人気の希望居住国はカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイ、そしてスペインなどですが、現在はアジア地域の国々にも目が向けられています。フィリピンやタイなどですと、標準的な年金があれば余るくらいで、例えばフィリピンで月に 20 万円もあればお手伝いさんや運転手を雇って生活することもできます。

スペインも比較的安い方でした。その生活ぶりがどんなものか、少し具体的に触れてみたいと思います。

スペイン文化の一端紹介

まず、スペインといったら皆さんは何を想像されるでしょうか？ 闘牛、フラメンコ、それともサッカー？ そう、スペインを象徴するものといえば――どこまでも広がる赤土の台地、情熱の太陽、白い家、オリーブ、ひまわり、ワイン、カナリア諸島のマグロ、それに情熱のフラメンコ、闘牛、サッカーといったところでしょうか。サッカーといえば、「レアルマドリード」は世界一と言ってよいほどの選手補強をしていますよね。ワールドカップでも活躍した超スター選手を集めています。

コスタ・デル・ソルの生活 <地図を描く>

私が 1 年間の留学中に住んでいたのは、コスタ・デル・ソルにあるトレモリーノスという人口 5 万人ほどの町でした。コスタ・デル・ソルはスペインの一番南に位置する、地中海岸の一角です。日本語に訳すと「太陽の海岸」とも呼ばれ、1 年のうち 300 日以上が晴天です。温暖な気候のため、世界の各地から定年退職者が来て住みついています。

実は、ここは 30 年ほど前に、当時の通産省が「シルバー・コロンビア」との計画のもと

に、日本の定年退職者を送り込もうとした地域の一つなのです。他の候補地としては、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどもありました。でも、バブルの最盛期に入ると、「日本は老人まで輸出しようとしている！」と、各国からたたかれ、また国内からも「そんな外国よりも、国内にいる老人のケアにもっと力を入れるべきだ！」と、たたかれ、計画は尻すぼみになってしまったわけです。

でも、日本政府が選んだ場所くらいですから、日本人にはとても住みやすい地域です。

コスタ・デル・ソルには日本からも 30 人ほどが来ていました。大部分が私のような定年退職者でしたが、なかには外国人と結婚した 40 代の日本人女性、自分たちで小さなホテルを経営している 30 代の大和なでしこもいました。

ここでは、パラボラアンテナを設置し、局と契約し受信料を払えば、NHKの衛星放送がそのまま見られます。日本の新聞も、OCSといういわゆる宅配便で2~3日遅れで読むことができる。ただし、料金は高くなり、日本の5倍ほどになります。

何よりも、今はインターネットの普及で、日本の情報も即時に入り、またメールで日本の家族とも、国内のどこかにいるのと同じように連絡を取り合っている状況です。

私が特派員としてパナマに派遣された40年前は、インターネットはおろか、ファックスもなく、電話も交換手に申し込まなければつながらない状態でした。少し大げさですが、地球の果てに行ってしまったような感覚があったものです。

今は、ほとんどが、時差にも関係のないメールでのやりとりです。スペインのどこにいても携帯電話で、日本の家族の携帯電話ともつながる。本当に、想像もつかなかったほど、通信という面では地球が狭くなった、身近になった、ということを実感しますね。

物価は日本よりも安い

さて、スペインに住んでいてよいところは、魚も野菜も豊富で、日本人の食べるものがほぼすべて揃うということ。それになんといっても物価が安いということです。特に衣食住の「食」の面では、日本の半分か3分の1でしょうか。

例をあげればきりがありませんが、たとえば米は細長い、いわゆる外米と言われるものですが、また丸い日本のお米に近いものもありますが、1キロ約120円。日本のほぼ3分の1でしょうか。肉は牛、豚、鳥とも日本の3分の1の値段。日本で220円で売られている缶ビールは90円ほどです。日本に帰国してスーパーに買い物に行くと、アツという間に千円札が何枚も出て行ってしまうのには本当に驚きです。

向こうでは10ユーロ(当時1200円)も買い物をしたら、両手に抱えきれないほどの分量になるんです。賃貸のアパートは1LDKでしたが、広さは50㎡あり、日本の2LDKほどになります。すべての家具がついていて、来客用の食器もあります。ですから、家内と二人でスペインに渡ったときの荷物は、トランク3個ですべてが足りました。

家賃は月600ユーロ。当時は1ユーロ約120円でしたから約7万円です。こうして生活費の合計は夫婦で月約16万円ですみました。今、東京で同じ生活をしたら、多分、25~6万円はかかると思いますね。

スペインから帰国したとき、ある友人が皮肉を込めて冗談に声をかけてきました。「海外で生活ができるなんて優雅でいいねえ!」。そのとき、私も皮肉と冗談を込めて答えたんで

すね。

「そう、だって、日本じゃ、年金だけでは生活ができない。だから海外に住むようにしたんですよ」なんて。

それに、航空運賃ですが、ヨーロッパは遠く、昔はかなり高いとのイメージがありましたが、今は各航空会社が出している格安便とか、現地で日系の航空会社が出している「里帰り便」とか「家族呼び寄せ便」があつて、意外な低価格なんですね。盆や暮れなどのハイシーズンを除けば、成田——スペイン間の往復が10万円以下。私も何回かの往復を8万円ほどでやってきました。沖縄往復よりも少し高いくらいですかね。

人間と時間とどちらが主？

いい事尽くめのようですが、もちろん、海外ですから意に添わないことや、思うようにならないこともあります。例えば、スペインでは食事の時間が遅いこと。昼食は午後2時から、夕食は普通、夜9時あるいは10時からと遅いんです。いわゆる「シエスタ」(昼寝)の習慣があり、午後2時から5時頃までは会社も商店も休業となるからです。5時からまた8時頃まで働くので夕食も遅くなるわけです。レストランも8時過ぎないとオープンしません。

それに、時間がルーズであるということ。日本人ほど仕事熱心ではないこと。人によってはなかなか約束を守らないということです。

これについて、私が通っていたマラガ大学のラファエルという50歳くらいの教師が面白いエピソードを語ってくれたことがあります。

「少し前のことだけど、勉強熱心な日本人の男子学生が自分のクラスにいた。あるとき、仕事への取り組み方が話題になった。彼はクラスで得意そうに言ったんだ。

『日本は経済的にどこの国よりも発展してきた。それは、日本人がスペイン人よりも働き者だから。日本のサラリーマンにとって、会社は最も大事な存在。だから、みんな会社の業績を上げるためウィークデーは残業し、土曜、日曜に家にも、翌週の仕事を考えているんだ』って。

そこでボクは言ったんだ。『ええっ！そんな世界が、そんな生き方があるなんて驚きだねえ。スペインでは、ウィークデーの工作中も、今度の週末には何をして楽しむか、遊ぶか、そのことばかりを考えているんだよ』って」

この生き方を大げさに解釈すれば、日本では「時間と仕事が主(あるじ)で、人間がその従者」、スペインやラテンアメリカでは「人間が主(あるじ)で、時間や仕事はその従者」ともいえると思うんですね。世界には多様な価値観、人生観があるということですね。

本の出版「定年留学してみませんか？」

スペインでの生活は非常に新鮮で刺激的で、熟年の自分たちにもいろんな吸収するものがありました。これは是非、日本の皆さんにも伝えるべきだ、なんて考えが生じてきて、帰国後それらをまとめ、本を出版した次第です。「定年留学してみませんか？——60歳からのアクティブ・ライフのすゝめ——」といったタイトルです。<この本です>

出版社の了解を得て、私のホームページにも載せていますので、関心のある方はレジュメ

にある URL からアクセスなさってみてください。

最高齢？ まだ上手がいた！

ここで本の中に出てくる大学での生活を少し紹介したいと思います。クラス仲間はヨーロッパの国を中心に、アメリカ、アジア、アフリカからも来ていました。たとえば 10 数人の私のクラス仲間の国籍を拾っていくと、イギリス、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、ギリシャ、スイス、ユーゴスラビア、エストニア、イスラエル、アルジェリア、メキシコ、台湾、そして日本といった具合です。

年齢的には、現役の大学生から、ビジネスマン、OL と 20 代から 30 代までが大部分。ですから、若い学生仲間とは年齢的には親子のようなものでした。

でもその中にちょうど 70 歳の男性もありました。彼の名はグラハム・ラングレイ。カナダの出身。10 年前に 60 歳で定年退職し会社を起こした。社長兼使用人だという。その彼がこう言うんですね。

「年金だけでも生活はできるけど、家にいて楽な生活をして、テレビばかり見ていると、早死にしてしまう。70 歳まで会社をやったら、また勉強をすることにしたんだ。スペイン語をネ。将来は、ボランティアでスペイン語の国の人に英語を教えてあげようと思っているんだ。そのために、これが終わったら、英語の教師の資格もとらなきゃならない。人生やることがいっぱいあるねえ。ボクはこれから 80 歳まで頑張るよ」

エネルギーギッシュな未来に向かっての生き方——。私自身もずいぶんと啓発されたものでした。

「タケシ」と呼ばれて・・・

クラスはなかなかリラックスした楽しい雰囲気です。生徒も先生もお互いにファーストネームで呼び合う。私は 20 歳そこそこの若者からいつも「タケシ」と呼ばれていました。我々生徒も、スペイン語の先生を「ラファエル、リディア・・・」とかいわば呼び捨てです。それの方が親しさを増すからです。

何ととっても世界の各地から集まった、歴史も伝統も宗教も違う仲間と語り合うのは、とても新鮮で刺激的なものです。

「ハクシオン」くしゃみをする、すぐ近くの誰かが「サルー」または「ヘスス」と声をかけてくれます。

「サルー」とはスペイン語で「健康」の意味。「ヘスス」とは「イエス・キリスト」を指しています。どちらも「お大事に」といったような意味合いでしょう。問題はその時のしぐさなんです。日本では、普通くしゃみをするときには、手を口元に持っていきますよね。ヨーロッパでも一般的にはそうなんですが、スウェーデンからきた子はちょっと違っていた。肩に近いところの腕を、こうに口元に当てるんです。

「どうして？」って聞いたら、「だって手は握手をする。相手に対して汚いではないか」なんですって。「ところ変われば、しぐさも変わる」わけです。

授業ではときには研究発表のようなものもさせられます。なかにはワインについての研究発表を、教室でワインを飲みながらする、といった上手の学生もありました。

クラス仲間を我が家に招待

クラスの仲間も何回か我が家(アパート)を訪れました。そこでは私が家内と一緒にクッキングの腕をふるうわけです。

彼らは年齢的には自分の息子や娘みたいなもの。我が家の娘もかつてメキシコに留学したことがあり、そのとき周囲のいろんな方になにやかやとお世話になったかもしれない。そう思えば、恩返しというほどの大げさなものではありませんが、遠く母国を離れて留学している彼らの、若干でも激励になればとの思いからでした。

地球上のどこにあっても地球人、“お互いさま”じゃないかとの思いもあったからです。

それにもう一つの理由。それはクッキングの腕をふるうチャンス。クラス仲間がやってきたときには、私の十八番メニューをいくつか披露したわけです。

中華と西洋料理をそれぞれ 2 品ずつ。それにマグロの赤身とトロを買ってきて、握り寿司も初めて作りました。

学生たちが、最も日本的な料理といえば、すし。そのすしを食べたい、すしを食べたいと言うわけです。スペインのカナリア諸島はマグロ漁の拠点です。日本のスーパーにも時々スペインマグロが並んでいますよね。でもスペインに比べればずいぶん高い。このときは、アパート近くの市場で素晴らしいマグロの赤身とトロが手に入ったのです。

でも、さすがに私も握り寿司は初挑戦。ごはんがなかなか長方形のすし型とはならないんですね。小さなおにぎりみたいになってしまいましたが、それはそれで好評でした。

金髪の美人女子大生とのキス

このとき、ちょっとした嬉しいエピソードがありましてね。準備がほぼできたところにアパートの玄関のベルが鳴りました。私はあわてて、スリッパをやや厚底の靴に履き替えました。ふだん家では裸足またはスリッパでの生活ですが、靴で入ってくる彼らが日本式に靴を脱がなければいけないかな、なんて気を遣わなくてよいように、同じ物を部屋ではいる必要があったからです。

もう一面では、身長 162 センチの背の低い自分が、背の高い彼らに少しでも合わせようと、涙ぐましい努力をしたわけです。予定の 8 人がぞろぞろと入ってきました。

「ムイ ビエンベニード！（ようこそ!）」私はエプロンを脱いで玄関に立ち、女性とは一人ひとり、両頬にキスし、男性とは力強い握手で来宅を歓迎しました。

スペインでは、親しい間柄での最大の歓迎の情を表わすのはキスなのです。キスといっても、唇同士ではなく、両頬を触れ、抱擁し合うだけのものです。これをしないと、かえって歓迎の意が弱く、堅苦しい雰囲気になるからです。

とはいえ、金髪の美人女子大生とのキスは、瞬間的でも心をときめかすものがあります。妻も同じように全員と、しかも男子学生ともキスしているわけですから、こちらも問題ありません。還暦を超えて、若い外国人女性と頬を触れ合わせられるのも、スペインという文化風土にいるからこそ、だと思った次第です。

ギターの練習ぶりも披露

もう一つはギターです。スペインはご存知のようにギターの本場です。せっかく本場にいるのなら、なんとかギターも習いたいと、スペインに着いてまもなくギターを買い（これも日本の半額以下）、アパートの自宅で家庭教師から手ほどきを受けていました。

そこで会食の場が盛り上がってきた雰囲気に乗かって、私も下手なギター演奏、というよりも練習ぶりを皆に披露したんですね。曲目は「グリーンスリーブス」と「禁じられた遊び」。

まだまだ未熟でつかえたりしたのですが、みんなは「ブラボー」なんて拍手を送ってくれたんですね。たとえ、花束はなくても、拍手があっただけで演奏者は嬉しいもんですね。人間は、ときには、注目される“晴れ舞台”があることも大切だ、と思った次第です。

<お話しはここまでで、あとはパワーポイントで 70 枚ほどの写真をご紹介しますながらお話をしていきたいと思います>（説明のための手書きのメモあり）

私の話を聞いて「自分も留学を考えてみようか」と思われている方もいらっしゃるかもしれませんが。そこで心配になる一つが言葉。「スペイン語が、あるいは英語ができなくてはいけないのか」といったご心配。——その点は基本的に問題ないと思います。

私の場合は、たまたま現役時代にスペイン語を使っていましたが、受け入れの大学や語学学校では、英語でもスペイン語でも、どこでも入門から初級、中級、上級とクラスがあり、ご自分のレベルに合ったクラスを選べるようになっているからです。

コスタ・デル・ソルにある別の語学学校には「60 歳からのスペイン語の手習い」との本を出版し、元気に楽しんでいる日本からのシニアの方もいました。

若者たちに刺激を受け、異文化交流で青春を再体験されることは「人生 100 年」といわれる時代にとっても意義あることではないかと思えます。

どうぞ、ご自分の事情が許す方は、「定年留学」「熟年留学」を今後の生き方の一つとして検討されていかれてはどうでしょうか。